

【2】紙調査 or ネット調査の依頼

配布枚数：98 通

回収総数：79 通

（うち、ネット経由の調査は1通）

情報提供群と非提供群の人数比は、2回目調査拒否などの人数を考慮に入れた上で、ほぼ同数となるように分割した。その際、同一世帯内での情報のやりとりを防ぐため、同じ世帯に被験者が複数存在する場合には、必ず全員同じグループに属するように配慮した。

3. 調査メディア別の回答ミスの発生状況

本章では、紙によるアンケートによって調査を行った被験者とネット調査を行った被験者の、調査メディアの違いによって回答に違いが見られるかを示す。

まず、回答状況の違いを示す尺度のひとつとして、調査時に発生する誤回答の発生頻度を示す。図2および図3は、今回実際に行った調査において記入時の誤回答の発生回数を示したものである。図2では、意識調査の誤回答を示している。未回答とは全ての調査項目にまったく回答しなかったものであり、未記入は一部欠損している状態、誤回答は記入に誤りがあったものをさしている。図3はアクティビティダイアリ調査での誤回答の発生を示している。重複とは自宅外活動と自宅内活動が同時に発生している状態を指し、矛盾とは移動と前後の活動が一致しないことをさす。

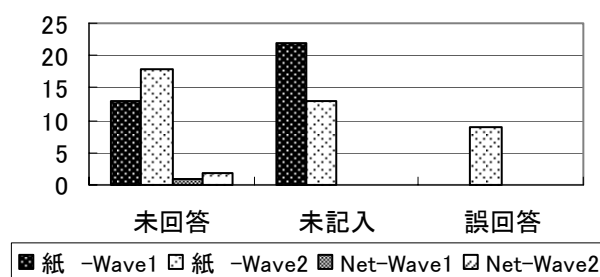


図2. 誤回答の発生頻度・意識調査

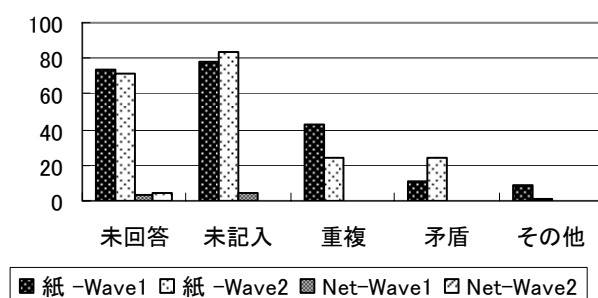


図3. 誤回答の発生頻度・AD調査

これらの結果を見ると、ネット調査では、選択式を多く採用し、矛盾する回答などのチェックルーチンを導入しているため、ほとんど誤回答が発生しない。その上、ミスがあった場合の連絡を行ったことで、Wave2ではほとんど記入ミスが発生しなかった。それに対して、紙を用いた調査では、これまでの経験から、よりミスを減少させるために、調査票記入例の同封や、調査票を記入しやすい形式にするなどの工夫を行い、Wave1～Wave2と同じ形式で調査を行ったにもかかわらず、記入ミスの発生率はほとんど変化がなかった。ネット調査においては、当初は誤回答や記入漏れが発生していたものの、入力データをチェックし、こちらからミスのあった被験者に、入力ミスを伝える連絡を行ったところ、翌日以降のデータ記入では、調査への参加をとりやめた例を除き、未回答や誤回答、入力忘れなどが無くなった。ネット調査は、調査主体からのコミュニケーションが容易になるため、連続的な調査においては、繰り返しの入力ミスを防ぐことができ、データコーディングなどの労力負担の低減や、欠損値等の増大を防ぐことができると考えられる。

4. おわりに

今回の調査においてはインターネットを介して調査に協力していただいた被験者の被験者が少なかった。これについては、調査中被験者に聞き取り調査を行ったところ「操作法が難しいのではないか」「自宅にインターネットを利用できる環境がない」「セキュリティが不安」などといった意見が挙げられた。インターネットを利用したオンライン調査は多くの利点を持っているが、このように参加への不安や、参加率の低下による被験者抽出のバイアス増大の可能性がある。今後は手段ごとの各調査項目への回答の違いについても検討していく。

<参考文献>

- 1) 松村暢彦, 新田保次, 谷村和則 (2003) 「トラベルフィードバック (TFP) の手続き簡略化による態度と行動変容への影響」 土木学会論文集, No. 737/IV-60, pp. 89-100